

64

印刷の仕組みについて簡単に教えてください。

●印刷・製本の流れを知っていれば、無用なコスト増が防げます。

わずか二ページで印刷製本の概要を説明することは到底不可能ですから、ここではポイントをいくつか述べたいと思います。

まず印刷ですが、たとえばA4判の本だからといってA4の用紙に印刷するわけではありません。A1（全紙八四一×五九四ミリ）やA2（半裁全紙の半分）などの大きな用紙に一六ページ分、八ページ分を一度に刷って、それを折りたたんで本にしていきます（この一位を「折り丁」といいます）。そこで、本のページ数は原則として、一六の倍数、八の倍数となります。お手もとの紙を半分折りたたむことを三回繰り返してみてください。それを再び広げますと紙が八等分されているはず。この八分の一が一ページに相当します。

印刷はこの折り丁ごとに行われるため、たとえばモノクロ印刷の本文のなかで一枚の写真だけをカラーにしようとすると、その写真が掲載される折り丁全体をカラー印刷することになり、不経済であることがおわかりいただけるでしょう。カラーページとモノクロページを

混ぜるときには、八ページ、一六ページの折り丁単位で考えなければなりません。

この後、実際の印刷時の発色を見るための試し刷りである色校正の段階になります。この段階での訂正は、訂正ページのデータを再度、印刷所に渡し、印刷所で該当ページのデータを差し替える形で行われます。ページをつくり直す費用だけでなく、印刷所でのページデータの差し替え料金も発生しますので、それまでの修正より割高になります。この点からも、印刷所に渡す段階になる前に校正を済ませておくようにしたいものです。

印刷の後には「製本」がひかえています。印刷した紙を折りたたんで、折り丁をページ順に重ねて綴じ、表紙を巻いて接着、周囲を裁ち落とします。この間、全体が綴じられ接着されるまでの間は、万一間違いが発見された場合、先ほどの八ページ、一六ページ単位の印刷のやり直しができますので、全部をやり直すのに比べて損害を少なくおさえることができます。そこで、印刷した用紙（印刷用語で「刷り取り」「一部抜き」などといいます）を取り寄せて最終確認する場合があります。ここで修正をする場合は、データ修正代に加え印刷代、用紙代までロスが発生します。また納期の面でも遅れが生じることとなります。

印刷製本は編纂のなかで最終の工程であるため、前工程の遅れの影響をもろに受けませんが、印刷製本の工程を圧縮するとトラブルのもとになります。特に、本はポスターやリーフレットなどと違い、ページ数が多い分、工程も複雑なので、無理押しは禁物です。早い段階から印刷会社に尋ね、日数を逆算したうえで校正を完了することが重要です。

何のため、誰のための

社史かを考えた

パイン株式会社

管理部 次長 毛利浩祥様



『パインアメ物語』
(A6判並製、224頁、
平成13年1月発行)

●皆に読まれるものをと「文庫本スタイル」に

創業五〇周年記念にあたっては記念行事が行われ、社史を発行するだろうということ、私はそれとなく感じていました。そして三年前、社長から「創立五〇周年を機会に会社の歴史を何らかの形でまとめておこう」という提案があり、当時、総務課にいた私が編集を任せられました。企画段階で社長から出た指示は、「他社の社史のように、さまざまな数字や出来事の記述をベースにしたものはうちの社風に合わないからよそう。それよりも、親しみやすく、読みやすく、パインらしいものにして、とにかく

く配った相手の人に読んでいただけるものしよう。特に、社員には理屈ではなく気持ちとして会社のルーツというか、精神を知ってもらいたい。そのうえで、これから先自分たちが何をしなければいけないのか、一人ひとりに考えてもらえたら、それにこしたことはない」ということでした。

飾りものはいらぬ、社員たちが将来を考える役に立てばいい——という社長の考えには、私も心から共鳴することができました。というのは、昭和六〇年から発行された社内報の『ふれあい』に、「道」という「ラムをもうけて創

業者である現会長の幼少期から昭和三九年の大
阪本社移転や滋賀工場建設などまでの経緯を詳
しくまとめられてあり、写真なども収集・整理済み
となっており、私はそれらの一連の作業を見聞
きして、決算書のようなものを以外はあまり保存
されていないことがわかっていたからです。ま
た、いくら気張って分厚いものをつくっても、
そのようなものはあまり歓迎されないというこ
とをほかから聞かされてもいました。

そういったことを出版社の方に率直に述べる
と、「それだったらこういう方法があります」と
いうことでいくつかの提案を受け、結局は文
庫本スタイルにして、いつでもどこでも手軽に
読んでいただけるものにしようと考えて、タイ
トルも優しく親しめるようにと『パインアメ物
語』に決めました。

文庫本スタイルにしたことのメリットはいく

つもありました。たとえば、あるはずだ……と
言われながらも見つからない資料をいつまでも
探し続ける手間が省けたこと、時系列の記述に
あまりこだわらなくても済んだことなどです。

●自分がしなければいけないことに専念

ところがそこで、一つの問題に突き当たりま
した。社内報の「コラム」道」には、昭和四〇年
代から五〇年代にかけてのまとまった記述がな
かったのです。昭和四〇年代前半の日本は高度
経済成長期のラストスパートにあたる時期でし
たが、その後はドルショック、オイルショック
が続いて戦後最大の不況に陥りました。昭和五
〇年代も再度のオイルショック、それに貿易摩
擦や円高、赤字国債など、それまで経験したこ
とのない出来事に次々と見舞われたときです。

たしかに、当社でもその間は滋賀工場要員の

相次ぐ退社や組合結成など、多難なことが頻発していました。しかしその反面、研究開発に力が入られ始めて新製品が次々と誕生するなど、創立期とは違った意味の活気や新たな意欲が芽生えていた時期でもありました。

そこで私は最初の編集方針を思い起こし、「ない資料にはこだわらない、あるものでごまかされるか」ということを考えてみました。幸い、ライターさんや出版社には編集開始の初期に滋賀工場で生産現場を見学してもらっていましたから、私の考えを前提に打ち合わせを繰り返して、新製品のカラー写真を数多く掲載するなどして、数字的な推移よりも当時の活き活きとした生の雰囲気伝えることに力を注ぎました。

また、編集責任者としては、文章の細かい部分などは出版のプロに任せて、提出された原稿内容のチェックに注意を絞ることにしました。

まず、原稿を素読みして大きな流れのなかで引っかかることはないか、いろいろな出来事が前後していることはないか、最後に社名や商品名などの間違いはないか、誤解を招くような言い方はされていないかといったように、おおよそ三段階くらいのフィルターをかけてチェックすることになりました。そのうえで、自分ではわからないこと、あるいは判断できないことは、その理由を書き出して社長の決断を仰ぎました。

●何をしたいか、何ができるか

ただ、私がこの一連の仕事を通じて感じたことは、「トップの意向と、担当者としての考え、希望をどのように調整するか」ということの大切さです。担当者がいくら他社の社史を研究して意欲に燃えても、会社の意向にそわなければ実現することはまずありません。さらに、いく

